



THÉORIE MATHÉMATIQUE
DU PRIX DES TERRES
ET DE LEUR RACHAT PAR L'ÉTAT
PAR
LEON WALRAS
Professeur d'économie politique à l'Académie de Lausanne.



Goldsmiths' Library



The Mathematical Theory of Banking
By F. Y. EDGEMORTH, Esq., M.A.

[Read before the British Association, September, 1886.]

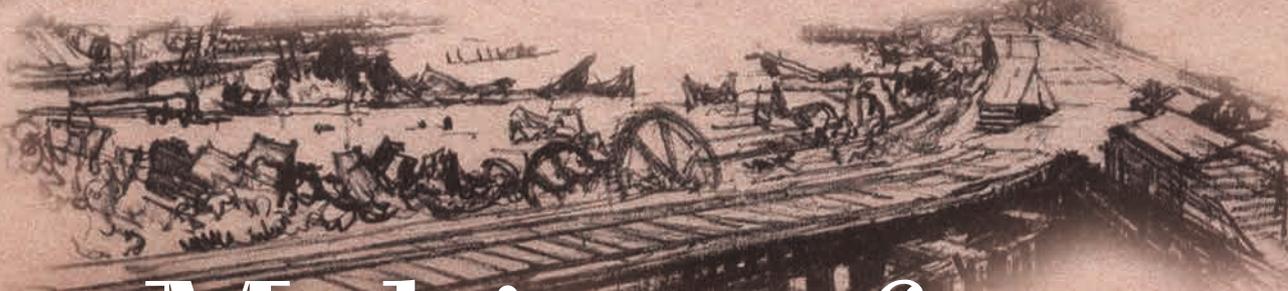
FREE TRADE v. FAIR TRADE.

Preliminary.



Parsons, Printer, 36, Oldbath Street, Waltham, Essex.

HISTOIRE
DES
CLASSES OUVRIÈRES
EN FRANCE
DEPUIS 1789 JUSQU'À NOS JOURS
PAR
E. LEVASSEUR



Geschichte

National-Oekonomie
in Deutschland

The Making of the Modern World

Part IV

BRITISH
MANUFACTURING INDUSTRIES.

EDITED BY
G. PHILLIPS BEVAN, F.G.S.

The Making of the Modern

▶▶ ゴールドスミス文庫の約9,000巻を電子化

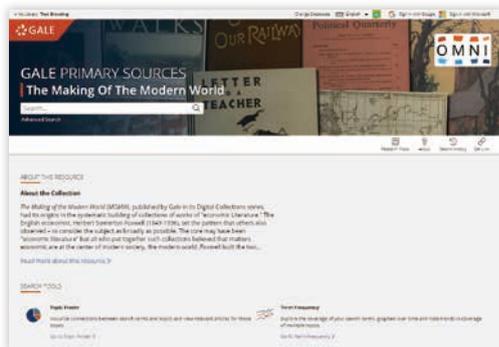
小社Galeはこれまで、ロンドン大学ゴールドスミス文庫所蔵文献(約77,000巻)を電子化し、*The Making of the Modern World Parts I, II, III*として提供してきました。本アーカイブは、同文庫でまだ電子化されていない文献約9,000巻を電子化、*The Making of the Modern World Part IV*としてご提供するものです。これにより、ゴールドスミス文庫所蔵文献の電子化プロジェクトは完結し、世界最高峰の経済学文献コレクションの全貌が明らかになるだけでなく、15世紀から20世紀に至る500年間に亘る経済学の古典、重要文献86,000巻へのアクセスが容易になることにより、新しい学術的な知見への道が開かれます。パートIVの電子化に際しては、原本を直接スキャンし、原本のイメージを高画質で再現、OCR処理を施し全文検索を可能にします。

▶▶ 経済史と経済学史の重要な転換期19世紀後半の文献を多数収録

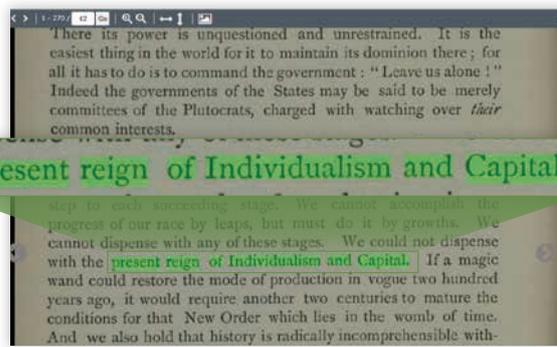
1848年の革命を経たヨーロッパ諸国は19世紀後半、国内の不況を背景に新たな成長の機会を求め、アジア・アフリカ諸国の植民地を進め、帝国主義の時代が到来します。鉄鋼、化学、電気等の重工業の発展、金融業の伸張、交通・運輸革命を実現した19世紀後半は、近代経済から現代経済への移行期として経済史上決定的に重要な時期と見なされています。経済学に目を向けると、アダム・スミス以来の古典派経済学がJ.S.ミルらにより完成を見た後の19世紀後半、限界革命を経て新古典派経済学が誕生し、現代の主流派経済学の礎が築かれます。また、一般的、抽象的、数理的アプローチを取る新古典派と対立しつつ、個別歴史研究や具体的、記述的アプローチを重視する歴史学派と経済史研究、法や慣習等の制度や人間の感情を重視する制度学派が生まれたのも19世紀後半です。さらに、19世紀後半には、『資本論』の刊行を経て、マルクス経済学の体系化の試みが始まります。20世紀の経済学の主要流派をなす新古典派、制度学派、マルクス経済学、経済史に繋がる経済学学派が出揃った19世紀後半は、経済学史上でも重要な転換期です。このように、経済史上も経済学史上も重大な時期と目されるにも関わらず、既存パートでは19世紀後半の文献は相対的に少なく、約6,700巻を数えるのみでした。パートIVは、19世紀初頭から1890年までの90年間をカバーしますが、収録文献数で見ると19世紀後半の文献が全体の90%以上を占め、従来のパートと併せて、この時代の学術的重要性に見合ったタイトル数を提供します。

▶▶ 改革クラブ(Reform Club)のパンフレットを収録

19世紀前半のイギリスでは、選挙制度、地方自治、労働、救貧行政、奴隷制廃止等、自由主義改革と呼ばれる一連の改革がホイッグ党(自由党)政権の下で実現しました。改革をリードしたホイッグ党では、党員が自由に議論を行なう場として、トリー党(保守党)のカールトン・クラブに対抗する党員のための交流団体を創設し、更なる党勢拡大を目指すべきであると、党の重鎮ダラム卿らが呼びかけました。この呼びかけに応じて、サー・ウィリアム・モルズワースらが中心になり、改革に賛同する党員を募り、ホイッグ党の看板である「改革」を冠した改革クラブ(Reform Club)を1836年に創設しました。改革クラブはホイッグ党員が自由に集う社交クラブであるとともに、各種改革を実現させるべく、具体的な政策提言を行なう、現代のシンクタンク的な性格をも兼ね備えていました。政策提言は、パンフレットの刊行を通じて行われました。本アーカイブは改革クラブが発行した約700篇のパンフレットを収録します。取り上げられているテーマは、選挙、教会、教育、衛生、医療、公務員、少年犯罪、死刑制度、軍隊等、多岐に及びます。また、国内問題のみならず、インド、トルコ、ギリシア、南アフリカ、オーストラリア、アイルランド、イタリア、フランス、ハンガリー、ロシア等、国際問題を扱ったパンフレットも多く含まれています。これらのパンフレットは、ホイッグ党(自由党)の一連の自由主義改革の背景を知る上での貴重な資料です。



トップページ



一字一句をフルテキスト検索。検索語はハイライト表示

データベースの概要 (Part IV)

- ◆ 期間：1800年-1890年
- ◆ 原資料所蔵機関：ロンドン大学図書館 (Senate House Library) 所蔵ゴールドスミス文庫
- ◆ 収録資料：書籍、パンフレット約9,000巻、約139万ページ
- ◆ 言語：英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、オランダ語、スペイン語、ポルトガル語、デンマーク語、スウェーデン語、ラテン語ほか
- ◆ 機能：ページ送り、画面拡大・縮小、全画面表示、輝度・コントラスト調整のビューワ機能の他、印刷、PDFファイルのダウンロード、OCRテキストのダウンロード、書誌自動生成、書誌情報のエクスポート、メール送信、ブックマーク等

《Part I》 ◆ 期間：1450年-1850年
◆ 原資料所蔵機関と収録点数：・ロンドン大学図書館 (Senate House Library) 所蔵ゴールドスミス文庫から約38,000巻
・ハーバード大学バーカー図書館所蔵クレス文庫から約22,000巻

《Part II》 ◆ 期間：1851年-1914年
◆ 原資料所蔵機関と収録点数：・ゴールドスミス文庫から約1,200巻
・コロンビア大学図書館所蔵セリグマン文庫から約2,100巻
・広島経済大学図書館所蔵セリグマン文庫から約700巻
・カンザス大学図書館所蔵経済学史コレクションから約1,400巻

《Part III》 ◆ 期間：1890年-1945年
◆ 原資料所蔵機関と収録点数：・ゴールドスミス文庫から約5,000巻 (「Parts I, II 以後に収集された文献を掲載します」)

収録文献例

イギリス

古典派経済学とその周辺

- ◆ パトリック・エドワード・ダブ『イギリス政治経済学の創始者、アンドリュー・ダブ』(1854)
- ◆ デヴィッド・ヒューム『経済学著作集』(仏訳)(1888)
- ◆ アダム・スミス『国富論』(独訳、C.W.アッシャー訳)(全2巻)(1861)
- ◆ アダム・スミス『国富論』(ジェイムズ・ソロルド・ロジャース編)(全2巻)(1869)
- ◆ アダム・スミス『国富論』(仏訳、ジェルマン・ガルニエ訳、ブランキ、リカード、マルサス、ベンサム、ジェイムズ・ミル、マカロック、テュルゴ、セイらの注釈)(全2巻)(1880-1881)
- ◆ アダム・スミス『国富論』(第6版の複製版)(アーネスト・ベルフォート・バックス序文)(全2巻)(1887)
- ◆ アダム・スミス『国富論』(マカロック注解)(1855)
- ◆ アダム・スミス『国富論』(ガルニエのスミス論の仏訳含む)(1831)
- ◆ アダム・スミス『道徳感情論、天文学、物理学、形而上学、言語学他論集』(1869)
- ◆ エルウィン・ナッセ『スミス『国富論』刊行100周年』(1876)
- ◆ エマヌエル・レーザ『アダム・スミスにおける富の概念：国民経済学研究』(1874)
- ◆ ジェイムズ・ボナー『アダム・スミス・クラブ会長講演』(1884)
- ◆ ジェイムズ・アンソン・ファラー『アダム・スミス』(1881)
- ◆ 著者不詳『アダム・スミスの生涯と著作の素描』(私家版)(1855)
- ◆ レスリー・スティーン『18世紀イギリス思想史』(全2巻)(1876)
- ◆ デヴィッド・リカード『全集』(仏訳)(セイ、マルサス、シスモンディ、ロッシ、ブランキ他の注釈)(1847)
- ◆ トマス・マルサス『人口論』(仏訳、ピエール・プレヴォ訳)(M.ロッシの序文、シャルル・コントによるマルサスの生涯と著作に関する注釈、ジョセフ・ガルニエの注釈)(1845)
- ◆ トマス・マルサス『人口論』(仏訳)(ギュスターヴ・ド・モリナリ序文)(1889)
- ◆ フランシス・ブレイス『マルサスとゴドウィンの理論について』(1821)
- ◆ ジェレミー・ベンサム『立法と政治経済学の原理』(仏訳、エチエンヌ・デュモン訳)(1888)
- ◆ ジョージ・ヴァリアーズ、ジョン・パウリング『フランスとイギリスの間の通商関係に関する第一次報告』(1834)
- ◆ ジョン・パウリング『フランスとイギリスの間の通商関係に関する第二次報告』(1835)
- ◆ ジョン・パウリング『スイスの商業と製造業に関する報告』(1836)
- ◆ ジョン・パウリング『シャムの王国と国民』(1859)
- ◆ ジョン・パウリング『フィリピン諸島への訪問』(全2巻)(1857)
- ◆ ジョン・パウリング『数、貨幣、会計における十進法』(1854)
- ◆ ジョン・スチュアート・ミル『自伝』(第3版)(1874)
- ◆ ジョン・スチュアート・ミル『自伝』(ヘレン・テイラー編)(1873)
- ◆ ジョン・スチュアート・ミル『議会改革に関する考察』(1859)
- ◆ ジョン・スチュアート・ミル『セント・アンドリュース大学開講講演』(1867)
- ◆ ジョン・スチュアート・ミル『過去30年間におけるインド経営の改善に関する覚書と東インド会社の議会への請願』(1858)
- ◆ ジョン・スチュアート・ミル『経済学原理』(独訳、アドルフ・ゼートベア訳)(1852)
- ◆ ジョン・スチュアート・ミル『サー・ウィリアム・ハミルトンの哲学とその著作で議論された主要な哲学的問題の検討』(1865)
- ◆ ジョン・スチュアート・ミル『政治経済学原理』(独訳)(全2巻)(1852)
- ◆ ウィリアム・レオナード・コートニー『ジョン・スチュアート・ミルの生涯』(1889)
- ◆ ショーンシー・ライト『ジョン・スチュアート・ミル追悼』(1873)
- ◆ ジョージ・ジェイコブ・ホリヨーク『労働者階級の人々から見たジョン・スチュアート・ミル』(1873)
- ◆ ジョン・ラムゼイ・マカロック『政治経済学原理』(仏訳)(全2巻)(1851)
- ◆ ジョン・ラムゼイ・マカロック『ケネー、アダム・スミス、リカードの生涯と著作の解説』(1859)
- ◆ ジョン・ラムゼイ・マカロック『税制の実務的・理論的考察：『エンサイクロペディア・ブリタニカ』のための論文』(1858)
- ◆ ジョン・ラムゼイ・マカロック『硬貨、紙幣、銀行：『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第8版のための論文』(1860)
- ◆ ロバート・トレンズ『オーストラリアにおける政治経済学と代議制』(1855)
- ◆ ロバート・トレンズ『1844年ピール条例の原則と実際の運用の解説と擁護』(1858)
- ◆ トマス・チャーマーズ『社会の道徳の現状と将来展望に関する政治経済学』(1856)
- ◆ ウィリアム・ハナ『トマス・チャーマーズに関する回想』(全2巻)(1854)
- ◆ ウィリアム・ハナ(編)『故トマス・チャーマーズの書簡選集』(1853)
- ◆ ナッソー・シーニア『政治経済学』(1854)
- ◆ ヘンリー・フォーセット『政治経済学の手引』(1863)
- ◆ ミリセント・ギャレット・フォーセット『政治経済学夜話』(1874)
- ◆ ハリエット・マーティノー『インドにおけるイギリスの統治』(1857)
- ◆ ハリエット・マーティノー『将来のインド政府に向けた提言』(1858)
- ◆ ハリエット・マーティノー『政治経済学を研究する義務について』(1832)
- ◆ ヘンリー・シジウィック『政治経済学原理』(1883)
- ◆ ジョージ・フィリップス・ベヴァン『イギリスのマニュファクチャー産業』(全15巻、第1,10巻欠)(1876-1877)

自由貿易主義

- ◆リチャード・コブデン『政治著述集』(全2巻)(1867)
- ◆リチャード・コブデン『政治著述集』(サー・ルイス・マレット序文)(1878)
- ◆ルイス・マレット『コブデンの政治的見解』(1869)
- ◆トーマス・ヘンリー・ファーラー『貿易との関係の中で見た国家』(1883)
- ◆トーマス・ヘンリー・ファーラー『自由貿易対公正貿易』(1886)
- ◆トーマス・ヘンリー・ファーラー『金と信用と価格の関係に関する考察：金銀委員会会員のために』(1887)
- ◆トーマス・ヘンリー・ファーラー『砂糖協定』(1889)
- ◆トーマス・ヘンリー・ファーラー『何を以って支払うのか、あるいは金、信用、価格』(1889)
- ◆イヴ・ギョ『フランスの穀物法』(英訳)(ジョン・プロビンによる訳)(1888)
- ◆ジョン・プロビン(編)『コブデン・クラブ論集：地方政府と税制』(1875)
- ◆ジョン・プロビン(編)『様々な国の予算に関する書簡集』(1877)
- ◆ウィリアム・ファウラー『金の価格騰貴：試論』(1875)

限界効用学派とその周辺

- ◆リチャード・ジェニングス『富と困窮に関する社会的迷妄』(1856)
- ◆ヘンリー・マクラウド『経済学要説』(全2巻)(1881-1886)
- ◆ヘンリー・マクラウド『銀行の理論と実務』(全2巻)(1866)
- ◆ヘンリー・マクラウド『経済哲学の原理』(全2巻)(1879)
- ◆ヘンリー・マクラウド『信用の理論』(全2巻)(1889-1891)
- ◆ヘンリー・マクラウド『信用と銀行：スコットランド銀行家協会講演』(1882)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『石炭問題』(1865)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『石炭問題』(第2版)(1866)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『将来起こりうる石炭資源の枯渇：王立研究所講演』(第2版)(1866)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『連合王国の同盟と成功を巡る展望：マンチェスター統計協会講演』(1876)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『マッチ税：財政の問題』(1871)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『銀問題』(1877)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『政治経済学』(1878)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『秋季における貨幣市場の頻繁な逼迫とイングランド銀行の行動：ロンドン統計協会講演』(1876)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『科学の原理：論理と科学的方法に関する論考』(全2巻)(1874)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『社会改革の方法、他論集』(1883)
- ◆ウィリアム・ジェボンズ『連合王国の硬貨の状態』(1868)
- ◆フランシス・エッジワース『数理心理学、あるいは道徳科学への数学の応用に関する試論』(1858)
- ◆フランシス・エッジワース『銀行の数理理論』(1888)
- ◆フランシス・エッジワース『メトレチケ(測定学)、あるいは確率と効用の測定法』(1888?)
- ◆ロバート・ギッフェン『資本の成長』(1889)
- ◆ロバート・ギッフェン『複本位制反対論』(1879)
- ◆ロバート・ギッフェン『複本位制に関する若干の誤謬』(1886)
- ◆ロバート・ギッフェン『近年のイングランドにおける物質的進歩の比率』(1887)
- ◆ロバート・ギッフェン『近年の物価変動と所得変動の比較』(1888)
- ◆ヘンリー・H.ギブズ、ヘンリー・R.グレンフェル『複本位制論争：パンフレット、論文、演説、書簡集成』(ジェボンズ、ギッフェン等の寄稿論文含む)(1884)
- ◆ハーバート・フォクスウェル『固定比率の複本位制に関する若干の謬見』(第1～6版)(1889-1897)

歴史学派・経済史

- ◆リチャード・ジョーンズ『政治経済学遺稿集』(ウィリアム・ヒューエル序文)(1859)
- ◆トーマス・トワーク、ウィリアム・ニューマーチ『物価と流通の状態の歴史 1848年から1856年』(第5,6巻)(1957)
※1793年から1847年までをカバーする1-4巻はPart Iに収録
- ◆ウィリアム・ニューマーチ『過去30年における経済学の発展』(1861)
- ◆ウィリアム・ニューマーチ『1859年における連合王国の貿易の結果』(1860-1861)
- ◆ウィリアム・ニューマーチ『イングランドとウェールズの選挙統計 1856年-1859年』(1859)
- ◆ウィリアム・ニューマーチ『イングランドとウェールズの選挙統計 1856年-1858年』(1859)
- ◆ウィリアム・ニューマーチ『1852年改革法から現在までの25年間に亘るイングランドとウェールズのカウンティとバラの選挙統計』
- ◆ウィリアム・ニューマーチ『直接税・間接税論集』(1861)
- ◆ジェイムズ・ソロルド・ロジャース『植民地問題』
- ◆ジェイムズ・ソロルド・ロジャース『学校・大学向け政治経済学便覧』(1868)
- ◆ジェイムズ・ソロルド・ロジャース『社会経済』(1888)
- ◆ジェイムズ・ソロルド・ロジャース『経済学と社会的・政治的行為との関係：講演』(1868)
- ◆ウィリアム・カニンガム『政治学と経済学：政治経済学の原理の本質に関する試論』(1884)
- ◆ウィリアム・カニンガム『経験科学としての政治経済学』(1887)
- ◆ウィリアム・カニンガム『高利貸に関するキリスト教の見解』(1884)
- ◆フレデリック・シーボーム『国際的改革について』(1871)
- ◆ウィリアム・アシュレー『政治学とは何か：トロント大学政治経済学教授就任演説』(1888)
- ◆ウィリアム・アシュレー『イングランドの経済史と経済理論序説 第1部：中世』(1888)
※『第2部：中世の終焉』はパートIIIに収録
- ◆W.H.ジョーンズ『ステープル商人、あるいは往時イングランドにおける羊毛交易』(1865)
- ◆トマス・サウジー『1851年までの植民地牧羊業と羊毛業の勃興、発展と現状』(1852)
- ◆デヴィッド・ブレンナー『スコットランドの産業：その勃興、発展と現状』(1869)

社会改革

- ◆エドウィン・チャドウィック『ドイツで実施されている治療行政と比較した予防行政』(1889)
- ◆エドウィン・チャドウィック『衛生、救済、治安業務の地方行政への委任に関する立法』(1873)
- ◆エドウィン・チャドウィック『衛生科学のジュビリー：公衆衛生検査官協会での講演』(1887)
- ◆エドウィン・チャドウィック『1888年に至る民間衛生と軍事衛生の進歩：プライトン講演』(1888)
- ◆ベンジャミン・ウォード・リチャードソン『諸国民の健康：エドウィン・チャドウィック：著作概説と伝記』(全2巻)(1887)
- ◆チャールズ・ブース『タワー・ハムレッツの人々の状態と職業』(1887)
- ◆ヘンリー・メイヒュー『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(全3巻)(1861-1862)
- ◆ヘンリー・メイヒュー『ロンドンの商店と会社』(1865)
- ◆ジョン・サイモン『ロンドンの衛生状態に関する報告』(1854)
- ◆ジョン・サイモン(エドワード・シートン編)『公衆衛生報告』(全2巻)(1887)

社会主義

- ◆アーサー・ジョン・ブース『ロバート・オーウェン：イングランドにおける社会主義の創始者』
- ◆著者不詳『チャーチスト運動の改革者アーネスト・ジョーンズの生と死：回想』(1869)
- ◆アーネスト・ジョーンズ『闘争の日、他詩集』(1855)
- ◆ジェームズ・クロスリー『アーネスト・ジョーンズとは誰であり、何を成したか』(1868)
- ◆フレデリック・リアリー『アーネスト・ジョーンズの生涯』(1887)
- ◆エドワード・カーペンター『民主主義の展望』(1883)
- ◆エドワード・カーペンター『社会進歩と個人の努力』(1886)
- ◆エドワード・カーペンター『現代の貨幣貸付と配当の意味』(1883)
- ◆エドワード・カーペンター『労働歌集』(1888)
- ◆エドワード・カーペンター『協同組合の生産：ルクレールの実験に関して』(1883)
- ◆シドニー・ウェブ『社会主義の進化：講義』(1888)
- ◆シドニー・ウェブ『利子率と分配の法則』(1888)
- ◆アニー・ベザント『近代社会主義』(1886)
- ◆アニー・ベザント『道徳の真実の基礎』(1882)
- ◆アニー・ベザント『自由、平等、友愛』(1882)
- ◆アニー・ベザント『懲罰の倫理』(1883)
- ◆アニー・ベザント『社会の進化』(1886)
- ◆アニー・ベザント『社会主義運動』(1887)
- ◆アニー・ベザント『急進主義と社会主義』(1887)
- ◆アニー・ベザント『イギリスの土地制度』(1882)
- ◆アニー・ベザント、ジョージ・ウィリアム・フット『社会主義は健全か：4夜に亘る論争の逐語的記録』(1887)
- ◆ジョージ・ウィリアム・フット(編)『進歩：先進思想の月刊誌』(製本版)(全5巻)(1883-1887)
- ◆フレデリック・デニソン・モーリス『社会の改革、いかにしてすべての階級が社会の改革に貢献し得るか』
- ◆ジョン・マルコム・フォーブス・ラッドロー『キリスト教社会主義とその敵対者たち』
- ◆チャールズ・ブラッドロー『社会主義—その誤謬と危険』
- ◆ヘンリー・フォーセット『国家社会主義と土地の国有化』(1883)

協同組合

- ◆ジョージ・ジェイコブ・ホリヨーク『死の論理、あるいは、なぜ無神論者は死を恐れなければならないのか』(1853)
- ◆同『自身の言葉で否定されたベリーの自然神学』(1853)
- ◆同『武器の組織ではなく、思想の組織』(1853)
- ◆同『ニューマン教授によって発展させられた哲学的宗教』(1851)
- ◆同『なぜ聖職者は議論を回避し、哲学者はそれに反対するのか』(1852)
- ◆同『世俗主義、あるいは民衆の実践哲学』(1854)
- ◆同『労働者と参政権』(1859)
- ◆同『世俗主義の原理の簡潔な説明』(1859)
- ◆同『禁酒促進のための社会的な方法』(1860)
- ◆同『ハリファックスにおける協同組合の歴史』(1867)
- ◆同『ロバート・オーウェンの生涯と最後の日々』(1871)
- ◆同『協同組合の論理』(1873)
- ◆同『アメリカ人の間で』(1881)
- ◆同『イングランドにおける協同組合の成長』(1887)

社会学・社会思想・社会批評

- ◆ハーバート・スペンサー『科学の分類』(1871)
- ◆ハーバート・スペンサー『人間対国家』(1884)
- ◆ハーバート・スペンサー『社会学研究』(1874)
- ◆ハーバート・スペンサー『第一原理』(1862)
- ◆ハーバート・スペンサー『度を越した法制度』(1854)
- ◆ハーバート・スペンサー『国家教育、自滅：『社会静学』の章抜粋』(1851)
- ◆ジョン・ラスキン『フォルス・クラヴィゲラ：イギリスの職人と労働者への手紙』(全8巻)(1871-1878)
- ◆ジョン・ラスキン『芸術の政治経済学』(1857)
- ◆ジョン・ラスキン『二つの道、芸術と装飾並びに工業へのその応用に関する講義』(1859)
- ◆ジョン・ラスキン『ゴシック建築の本質』(1854)
- ◆ウィリアム・スマート『プラトンの弟子：ジョン・ラスキンの批判的研究』(1883)

改革クラブ・パンフレット

- ◆アルフレッド・リチャーズ『コブデンとそのパンフレットの考察：コブデンへの手紙』(1853)
- ◆『銀行条例は更新すべきではない：元下院議員からグラッドストーン大蔵大臣への手紙』(1854)
- ◆エドウィン・チャドウィック『公務員採用のための公開競争試験の経済的、社会的、教育的、政治的重要性に関する講義』(1857)
- ◆ジェームズ・ジョン・ロイスデール『あらゆる階級は刑法の知識をもつべきである：講義』(1851)
- ◆ヘクター・ガヴィン『産業労働者階級の依存症とその社会的、道徳的状态への影響』(1851)
- ◆ジョージ・メリー『教育は義務化し得るか』(1858)
- ◆ジョージ・メリー『少年犯罪と矯正院』(1858)
- ◆ウィリアム・アンウィン『人民の労作としての教育：公教育制度構築の決議に関するジョン・ラッセル卿への手紙』(1856)
- ◆ウィリアム・J.E.ベネット『教区民への別れの手紙』(1851)
- ◆『教会と教育問題：政府の公教育計画に対する教会の反対に対する見解』(1840)
- ◆セオドア・ゴルトン『教会裁判所と教会税：グラッドストーン大蔵大臣への手紙』(1854)
- ◆エドワード・マスカット『教会裁判所の歴史と権力』(1845)
- ◆ウィリアム・ブルース『教会裁判所がいかに公衆から収奪しているか』(1856)
- ◆アンドリュース・グレイ『民事裁判所と教会裁判所の間の現在の紛争』(1839)
- ◆エドワード・ヘンリー・スタンリー『教会税問題』(1853)
- ◆『教会改革と聖職者の犯罪』(1846)
- ◆ウィリアム・ボットニング『人民の社会的、道徳的教育に関する書簡』(1854)
- ◆エドワード・ウェブスター『死刑に関する三論文』(1856)
- ◆チャールズ・フィリップス『死刑に関する様々な思想』(1856)
- ◆アルフレッド・オーガン『鉄道事故の防止』(1855)
- ◆ヘンリー・ステューヴンス『コレラ：その伝染性、風土性、感染性の分析』(1854)
- ◆ロンドン首都衛生協会『衛生改革と衛生改革者』(1855)
- ◆ジェームズ・ケネディ『医療の独占の素描と改革プラン』(1836)
- ◆ジョセフ・ヘンリー・グリーン『医療改革の試金石：サー・ロバート・ハリス・イングリッシュへの手紙』(1841)
- ◆ジェームズ・ギルクレスト『黄熱に関する報告』(1852)
- ◆『十字架対三日月：政治的、宗教的観点から考察した東方問題』(1854)
- ◆『イギリス政府と東方問題』(1854)
- ◆『東方問題解決の手引』(1853)
- ◆『外交の神秘化と大衆の軽信：英仏同盟』(1855)
- ◆『1834年以降のインド政府』(1852)
- ◆ヘンリー・プリンセップ『1853年のインド問題』(1853)
- ◆ジョン・ディッキンソン『インド、官僚制の下での政府』(1853)
- ◆J.S.マクレアン『東インド会社の不正運営の摘発』(1852)
- ◆『サー・チャールズ・ネイピアと東インド会社の役員』(1857)
- ◆ロバート・ジェームズ・ロイ・キャンベル『インド反乱：その原因と解決策：パーマストン卿への手紙』(1857)
- ◆ケネス・マッキーン『インド反乱は誰が責めを負うべきか』(1857)
- ◆『インドのための正義：パーマストン卿への手紙』(1858)

- ◆『インドの財政』(1853)
- ◆『インド軍再編の手引』(1858)
- ◆ジョージ・ブルース・モールソン『ベンガル軍の反乱：歴史の物語』(2部)(1857-1858)
- ◆ジョージ・ピュイスト『インドに関する覚書』(1853)
- ◆ジョン・キングズミル『アイルランドの税制：資産・所得税法の同地への拡大に関して』(1853)
- ◆『アイルランドの窮境』(1867)
- ◆ジョージ・キャンベル『アイルランドの土地』(1869)
- ◆グスタフ・ディーツェル『ドイツにおける国民政党的形成、ヨーロッパにおける現在の危機の必然性』(英訳)(1855)
- ◆マイルズ・トーマス・ステイブルトン『中央イタリアにおけるフランスとオーストリア』(1852)
- ◆『戦争は公正か：パーマストン卿への手紙』(1855)
- ◆『コシュートと『ザ・タイムズ』』(1851)
- ◆『コシュート』(1854)
- ◆アレクサンドル・ゲルツェン『1825年のロシアの陰謀』(フランス語)(1858)
- ◆ヴァレリー・クラシンスキー『ロシアとヨーロッパ：現在の戦争のあり得る帰結』(1854)
- ◆ジュゼッペ・マッツィーニ『最近のジェノヴァ反乱の擁護』(1858)
- ◆チャールズ・マクファーレン『ナポリ政府とグラッドストーン氏：アバディーン卿への手紙』(1851)
- ◆『エジプトの現在の危機：我が国とインドの大陸間交通に関して』(全2巻)(1851)
- ◆ルイ・エチエンヌ・デュプレイユ=ヘリオン『皇帝ナポレオン3世とイギリス』(1858)
- ◆『喜望峰における立法議会設立に関する論集』(1851)
- ◆ヘンリー・サミュエル・チャプマン『議院内閣制、あるいはオーストラリア植民地のための責任ある行政省庁』(1854)

アイルランド

- ◆ジョン・エリオット・ケアンズ『政治経済学の若干の原理に関する新たな解釈』
- ◆ジョン・エリオット・ケアンズ『政治経済学試論集』
- ◆ジョン・エリオット・ケアンズ『政治論集』
- ◆ギュスターヴ・ド・ボーモン『社会的、政治的、宗教的アイルランド』
- ◆サミュエル・グリーア『アイルランドにおける地主と小作人の関係』
- ◆トマス・エドワード・クリフ・レスリー『経済的に考察したヨーロッパの軍事制度』(1856)
- ◆トマス・エドワード・クリフ・レスリー『アイルランド、イングランド、大陸諸国の土地制度と産業経済』(1870)
- ◆トマス・エドワード・クリフ・レスリー『職工学校の進歩と現状に関する考察』(全2巻)(1852)
- ◆トマス・エドワード・クリフ・レスリー『金融改革』
- ◆トマス・エドワード・クリフ・レスリー『フランスの土地制度』
- ◆ジョン・K.イングラム『政治経済学の歴史』(1888)
- ◆ジョン・K.イングラム『政治経済学の現状と展望』(1878)
- ◆ジョン・K.イングラム『労働と労働者』(フランス語)(1881)
- ◆マイケル・ジョージ・ムルホール『スチュアート朝期以降の国富増大に関する試論』(1883)
- ◆マイケル・ジョージ・ムルホール『諸国民の負債』(1884)

フランス

古典派経済学とその周辺

- ◆ジャン・バティスト・セイ『実践政治経済学講義』(独訳)(マックス・シュティルナー注釈)(1845-1846)
- ◆ジャン・バティスト・セイ『政治経済学』(1889)
- ◆シャルル・デュノワイエ『著作集 第2巻』(1870)
- ◆アントワーズ・シュルビュリエ『経済学とその主要な応用に関する要説』(全2巻)(1862)
- ◆フレデリック・バステア『全集』(全7巻)(1862-1878)
- ◆フレデリック・バステア『著作選集』(アルフレド・フォヴィエ編)(1889)
- ◆フレデリック・バステア『政治経済学試論集』(英訳)(1874)
- ◆ミシェル・シュヴァリエ『アダム・スミスと経済学の基礎』(1874)
- ◆ミシェル・シュヴァリエ『貨幣とその派生物』(1872)
- ◆ミシェル・シュヴァリエ『労働の自由の歴史による政治経済学の歴史』(1869)
- ◆ミシェル・シュヴァリエ『1862年の万国博覧会』(1862)
- ◆ミシェル・シュヴァリエ『古代メキシコと近代メキシコ』(1863)
- ◆ミシェル・シュヴァリエ『金の蓋然的価値下落』(1859)
- ◆ミシェル・シュヴァリエ『普遍的貨幣の構築』(1868)
- ◆アドルフ・ジェローム・ブランキ『ヨーロッパにおける政治経済学の歴史』(英訳)(1880)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『貨幣について』(1866)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『貨幣問題』(1869)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『貨幣問題の探求』(1870)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『イギリスの金融恐慌』(1866)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『イングランド銀行とスコットランド銀行』(1867)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『為替と流通』(1869)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『金と貨幣』(1870)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『通商の自由、1860年の通商条約の帰結』(1869)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『政治経済学の一般観念』(1866)
- ◆ルイ・ヴォロヴスキ『マニファクチャーにおける児童労働』(1868)
- ◆アントニ・ルイエ『ヴォロヴスキ、その生涯と業績』(1880)
- ◆アントニ・ルイエ『消費協同組合』(1876)
- ◆ポール・ルロア=ボーリユ『近代諸国民における植民地主義』(1874)
- ◆ポール・ルロア=ボーリユ『富の分配と不平等の縮小傾向に関する試論』(1881)
- ◆ジャン・ギュスターヴ・クルセル=スヌイユ『社会科学研究』(1862)
- ◆ジャン・ギュスターヴ・クルセル=スヌイユ『自由と社会主義、あるいは産業労働の組織原理に関する論議』(1862)
- ◆ジャン・ギュスターヴ・クルセル=スヌイユ『理論的・実践的政治経済学』(全2巻)(1867)
- ◆ジャン・ギュスターヴ・クルセル=スヌイユ『銀行取引の理論的・実務的論考』(1857)
- ◆ジュール・デュ・ムニル=マリニー『インド、エジプト、ユダヤ、ギリシアの古代諸民族の政治経済学の歴史』(全3巻)(1878)
- ◆シャルル・ジッド『政治経済学原理』(1884)
- ◆ギュスターヴ・ド・モリナリ『ロシアに関する書簡』(1877)
- ◆ギュスターヴ・ド・モリナリ『アカデミー・フランセーズ除名者サン・ビエール師の生涯と著作』(1857)

限界効用学派

- ◆レオン・ワルラス『社会的理想の探求：バリ公開講義 第1シリーズ：社会の一般理論』(1868)
- ◆レオン・ワルラス『貨幣の理論』(1886)
- ◆レオン・ワルラス『地価及び国家による土地買戻しの数理理論』(1880)
- ◆レオン・ワルラス『交換方程式、生産方程式』(1876)
- ◆レオン・ワルラス『本位貨幣の価値の不変性』(1882)
- ◆レオン・セイ、レオン・ワルラス『人民債権』(1866)
- ◆レオン・セイ『フランスの財政』(1883)
- ◆レオン・セイ『営利事業への国家の介入：過去30年間におけるイングランドにおける国家介入の成長』(1884)
- ◆『財政辞典』(監修レオン・セイ)(1889)
- ◆モーリス・ブロック『ヨーロッパ諸国と比較したフランスの統計』(全2巻)(1860)
- ◆モーリス・ブロック『1815年以降のフランスの財政』(1863)
- ◆イヴ・ギヨ『経済学』(1881)
- ◆イヴ・ギヨ『社会経済学原理』(英訳)(1884)
- ◆クレマン・ジュグラー『為替と振出の自由』(1868)

歴史学派・経済史

- ◆エミール・ルヴァスール『1789年から1870年までのフランスにおける産業労働者階級の歴史』(1867)
- ◆エミール・ルヴァスール『賃金の理論』(1888)
- ◆エミール・ルヴァスール『ヴォロフスキの生涯と業績』(1877)
- ◆エミール・ルヴァスール『フランスにおける政治経済学教育と統計学教育の歴史概説』(1883)

社会主義

- ◆サン＝シモン『新キリスト教』(英訳)(1834)
- ◆サン＝シモン『産業体制論』(全2巻)(1821)
- ◆サン＝シモン『著作選集』(全3巻)(1859)
- ◆アーサー・ジョン・ブース『サン＝シモンとサン＝シモン主義』(1871)
- ◆シャルル・フーリエ『魂の情念』(英訳)
- ◆ピエール＝ジョセフ・ブルードン『革命における正義と教会における正義』(全3巻)(1858)
- ◆ピエール＝ジョセフ・ブルードン『19世紀における革命の一般理念』(1851)
- ◆ピエール＝ジョセフ・ブルードン『財産とは何か』(英訳)(1876)
- ◆ピエール＝ジョセフ・ブルードン『政治的矛盾：19世紀における立憲運動の理論』(1870)
- ◆ピエール＝ジョセフ・ブルードン『労働権と財産権』(1848)
- ◆ピエール＝ジョセフ・ブルードン『イタリアにおける連邦と統一』(1862)

- ◆ギュスターヴ・シャルル・ファグニエス『18世紀、19世紀のパリにおける産業と産業階級』(1877)
- ◆ジャン・ジュール・クラマジェラン『フランスにおける税の歴史』(全3巻)(1867-1876)

- ◆ピエール＝ジョセフ・ブルードン『進歩の哲学』(1853)
- ◆ピエール＝ジョセフ・ブルードン『福音書注釈』(1866)
- ◆ジュール・ヴロー『ブルードンとその経済学体系』(1853)
- ◆プリズベル・リサガレー『1871年パリ・コミューンの歴史』(英訳、エレンア・マルクスによる訳)(1886)
- ◆エチエンヌ・カベ『1789年から1830年までの民衆のフランス革命史』(全4巻)(1839-1840)
- ◆ポール・ルロア＝ボリュー『集産主義：新しい社会主義の批判的検討』(1884)
- ◆レオン・セイ『地方自治体の社会主義と国家社会主義』(1886)
- ◆ギュスターヴ・ド・モリナリ『1870年9月4日の革命以前の社会主義運動と公開討論会』(1872)

社会学

- ◆オーギュスト・コント『オーギュスト・コントの8つの回状』(英訳)(1882)
- ◆オーギュスト・コント『実証的宗教の教理問答』(英訳)(1858)
- ◆オーギュスト・コント『実証主義概論』(英訳)(1865)
- ◆オーギュスト・コント『社会学小論』(1883)
- ◆オーギュスト・コント『保守主義者への訴え』(1855)
- ◆オーギュスト・コント『実証政治学体系』(全4巻)(1851-1854)
- ◆オーギュスト・コント『実証政治学体系』(英訳)(全4巻)(1851-1877)
- ◆ジョージ・ヘンリー・ルイス『コントの科学哲学』(1853)

- ◆ジャン・フランソワ・ウジェーヌ・ロビネ『オーギュスト・コントの著作と生涯：解題』(1860)
- ◆ヘンリー・エドガー『実証主義暦、あるいはオーギュスト・コントにより制定された公的記念日の転換システム』(1856)
- ◆エミール・リトレ『オーギュスト・コントとスチュアート・ミル』(付・グレゴワール・ヴィルボーフ『スチュアート・ミルと実証哲学』)(1866)
- ◆アニー・ベザント『オーギュスト・コント：その哲学、宗教、社会学』

社会改革

- ◆フレデリック・ル・プレー『人類の本質的構成』(1881)
- ◆フレデリック・ル・プレー『作業場の慣習と十戒に基づく労働の組織』(1870)
- ◆フレデリック・ル・プレー『作業場の慣習と十戒に基づく労働の組織』(英訳)(1872)
- ◆フレデリック・ル・プレー『統治の計画と社会組織』(1881)
- ◆エミール・シェイツン『政治学自由学院政治経済学講義』(1883)
- ◆エミール・シェイツン『1856年から1869年までのラヴダンの直系家族』

- ◆シャルル・ド・フレシネ『フランスにおける産業と地方自治体の健全化に関する報告』(1864)
- ◆シャルル・ド・フレシネ『フランスと外国における産業と地方自治体の健全化に関する追加報告』(1868)
- ◆シャルル・ド・フレシネ『イギリスにおける不健全な工場と作業工程の健全化に関する報告』(1864)
- ◆シャルル・ド・フレシネ『鉄道の経済的傾向』(1861)

ベルギー

- ◆エミール・ド・ラヴレー『現代の諸問題』
- ◆エミール・ド・ラヴレー『財産とその原始的形態』(1874)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『原子財産』(英訳)(トマス・エドワード・クリフ・レスリー序文)(1878)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『貨幣市場とその危機』(1865)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『現下の恐慌における金と貨幣』(1882?)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『恐慌と貨幣収縮』(1885)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『国際複本位制と本位金属を巡る争い』(1881)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『政治経済学要論』(1882)

- ◆エミール・ド・ラヴレー『民主主義と政治経済学』(1878)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『自然法と政治経済学の対象』(1883)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『プロテスタントとカトリック——諸国民の自由と繁栄に対するその影響：社会経済研究』(英訳)(ウィリアム・グラッドストーン序文)(1875)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『今日の社会主義』(英訳)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『バルカン半島』(英訳)(1887)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『ベルギーの農村経済に関する試論』(1863)
- ◆エミール・ド・ラヴレー『ベルギーにおける金の問題』(1860)

イタリア

- ◆ルイーダ・コッサ『政治経済学研究入門』(1878)
- ◆ルイーダ・コッサ『政治経済学研究入門』(英訳)(W.ジェボンズ序文)(1880)
- ◆ルイーダ・コッサ『初等政治経済学』(1878)

- ◆ルイーダ・コッサ『初等財政学』(1876)
- ◆ジュゼッペ・リッカ＝サレルノ『財政学における新しい体系的理論』(1887)
- ◆フランチェスコ・トリンチェラ『政治経済学教程』

ドイツ

古典派経済学

- ◆ カール・ロートベルトゥス『土地所有をめぐる今日の信用逼迫の解明と方策』(全2巻)(1868-1869)
- ◆ カール・ロートベルトゥス『フォン・キルヒマンへの手紙 第三書簡：リカード地代論の批判と新しい地代論の基礎付け』(1851)
- ◆ ハインリッヒ・ディーツェル『カール・ロートベルトゥス：その生涯と学説』(全2巻)(1886-1888)
- ◆ アウグスト・オンケン『レッセ・フェールとレッセ・パッセの格言：その起源と生成』(1886)
- ◆ アウグスト・オンケン『文化史におけるアダム・スミス』(1874)
- ◆ アウグスト・オンケン『アダム・スミスとイマヌエル・カント：人倫、国家、経済に関する両者の学説の調和と相互関係』(1877)
- ◆ アウグスト・オンケン『老ミラボーとベルンにおける経済社会』(1886)

歴史学派、経済史

- ◆ ヴィルヘルム・ロッシェ『ドイツにおける国民経済学の歴史』(1874)
- ◆ ヴィルヘルム・ロッシェ『政治経済学原理』(全2巻)(英訳)(英訳のための小論「紙幣、国際貿易、保護制度」とルイ・ヴォロヴスキの予備的試論「政治経済学における歴史的方法」付)(1878)
- ◆ ヴィルヘルム・ロッシェ『政治経済学原理』(全2巻)(仏訳、ルイ・ヴォロヴスキによる訳)(1857)
- ◆ ヴィルヘルム・ロッシェ『政治経済学研究』(仏訳)
- ◆ ヴィルヘルム・ロッシェ『国民経済学のドイツ・ロシア学派』(1870)
- ◆ ヴィルヘルム・ロッシェ『農業と原料生産の国民経済学』(1867)
- ◆ カール・アルント『国民経済学の不変の法則に対するヴィルヘルム・ロッシェの体系』
- ◆ カール・クニース『国民経済学の価値論』(1855)
- ◆ カール・クニース『信用』(全2巻)(1876-1879)
- ◆ カール・クニース『貨幣』(1885)
- ◆ グスタフ・フォン・シュモラー『ストライキと労働組合』(1872)
- ◆ グスタフ・フォン・シュモラー『国家学と社会学の文学史』(1888)
- ◆ アドルフ・ワグナー『ライヒスバンク』(1883)
- ◆ アドルフ・ワグナー『我が国の通貨改革』(1877)
- ◆ アドルフ・ワグナー『ドイツの複本位通貨政策のために』(1881)
- ◆ ゲオルク・ルートヴィヒ・フォン・マウラー『ドイツにおける賦役農地、農民耕地、農地制度の歴史』(全4巻)(1862-1863)
- ◆ カール・テオドール・イナマ=ステルネック『カロリング朝期のドイツにおける大荘園領主制の形成』(1878)
- ◆ アルベルト・シェフレ『人間の経済の社会体系』(全2巻)(1873)
- ◆ ヘルマン・シェーラー『世界商業史』(全2巻)(1852-1853)
- ◆ ヘルマン・シェーラー『古代から現代に至る全国民の商業史』(仏訳)(全2巻)(1857)
- ◆ フリードリッヒ・ヴィルヘルム・パートールト『ドイツハンザ同盟の歴史』(全3巻)(1854)
- ◆ ゲオルク・フォン・シャント『中世末期のイギリス商業政策』(全2巻)(1881)

社会主義

- ◆ フェルディナント・ラッサール『バステリア・シュルツェ・フォン・デーリツェ氏、経済学のユリアヌス、あるいは資本と労働』(1864)
- ◆ フェルディナント・ラッサール『カール・ロートベルトゥス宛書簡集』(アドルフ・ワグナー序文)(1878)
- ◆ フェルディナント・ラッサール『学問と労働者』(1863)
- ◆ フェルディナント・ラッサール『ライプチヒ中央委員会への公開答状』(1868)
- ◆ マルクス、エンゲルス『共産党宣言』(英訳)(1888)
- ◆ カール・マルクス『資本論』(第3版からの英訳)(1887)
- ◆ エンゲルス『イングランドにおける労働者階級の状態』(英訳)(1887)
- ◆ エンゲルス『アメリカにおける労働運動』(1887)
- ◆ アルノルト・ルーゲ『新しいドイツ：その近代史、文学、哲学、宗教、芸術』(1854)
- ◆ オイゲン・カール・デューリング『国民経済学説の批判的基礎付け』(1866)
- ◆ オイゲン・カール・デューリング『国民経済学と社会経済学教程』(1876)

協同組合

- ◆ ヘルマン・シュルツェ=デーリチュ『労働者と職工のための政治経済学講義』(仏訳)(全2巻)(1874)
- ◆ ヘルマン・シュルツェ=デーリチュ『ドイツにおける労働者階級と団体制度』(1863)
- ◆ ヘルマン・シュルツェ=デーリチュ『資本とその労働との関係』(1863)

オーストリア

- ◆ オイゲン・フォン・ベーム=バヴェルク『資本と資本利子 第1巻：資本利子理論の歴史と批判』(1884)
- ◆ ルドルフ・アウスピッツ、リヒャルト・リーベン『価格理論の研究』(1889)
- ◆ ジェイムズ・ボナー『オーストリアの経済学者とその価値論』(1888)

アメリカ

- ◆ フランク・ウィリアム・タウシグ『米関税史』(1888)
- ◆ スティーヴン・ダウエル『古代から現在に至るイングランドにおける租税の歴史素描』
- ◆ ウィリアム・コーネリウス・ワイコフ『アメリカ絹織物マニュファクチャー』
- ◆ ヘンリー・チャールズ・ケアリー『著述集』(全2巻)(1883)
- ◆ ヘンリー・チャールズ・ケアリー『国の財政、通貨、その他の経済的テーマに関する論集』(1875)
- ◆ ヘンリー・チャールズ・ケアリー『国内と外国における奴隷貿易、なぜ奴隷貿易が存在し、いかにして廃止しうるか』(1872)
- ◆ ヘンリー・チャールズ・ケアリー『北部と南部』(1854)
- ◆ エドウィン・セリグマン『鉄道運賃と州際通商法』(1887)
- ◆ エドウィン・セリグマン『オーウェンとキリスト教社会主義者』(1886)
- ◆ ヘンリー・ジョージ『保護貿易か自由貿易か：関税問題の検討』(1886)
- ◆ ヘンリー・ジョージ『進歩と貧困』(1880)
- ◆ ヘンリー・ジョージ『社会問題』(1884)
- ◆ ジョージ・ガントン『富と進歩』(1888)
- ◆ ジョージ・ガントン『8時間労働運動の経済的、社会的重要性』(1889)
- ◆ ヘンリー・カーター・アダムズ『合衆国における税制 1789年-1816年』
- ◆ スチュアート・ウッド、ジョン・ベイツ・クラーク『賃金問題に寄せて』(1889)
- ◆ リチャード・セオドア・イリー『現代におけるフランスとドイツの社会主義』(1883)
- ◆ リチャード・セオドア・イリー『政治経済学序説』(1889)
- ◆ サイモン・ネルソン・パッテン『価格の安定性』(1889)
- ◆ ジョージ・タッカー『民衆のための政治経済学』(1859)
- ◆ フランシス・A.ウォーカー『貨幣』(1878)
- ◆ フランシス・A.ウォーカー『土地とその地代』(1883)
- ◆ フランシス・A.ウォーカー『初等政治経済学』(1889)